

大阪社会医療センターの 思い出

父親の思い出

[ペガサスリハビリテーション病院 副院長] 本田 良宣

創立50周年、新病院への御移転おめでとうござい ます。

昭和59(1984)年に大阪市立大学医学部整形外科に 入局しました本田良宣です。入局当時は父親と同級 生であった島津教授が御在任中で、なにかのおりに 私を紹介していただくときには"良寛の息子や"が常 套句になっておりました。紹介された諸先生方の反 応はさまざまではあったのですが、"あの良寛"の息子か、 という反応が多かったように記憶しております。実家 の前で包丁かドスを持ったややこしい人と急にケン カをしだして警察に父親も一緒に連行されていった ことなど父親との記憶は色々あります。これが普通の 家族の姿だと思いこんでいたのですが、徐々に少し 違うと気付いて現在に至っております。なぜ釜ヶ崎 で医療活動をしようとしたのか、私が医師になって2 年目の昭和60(1985)年に良寛は亡くなっており、残念 ながらそのことについて話を聞いたことはありません。

良寛の父親(私の祖父)は本田喜良(俳号:一杉)といい 鴫野で開業していたのですが、俳句のホトトギスの 同人でもありました。彼は長島愛生園などのハンセン 病施設を訪問し俳句を指導することを通じて学生時 代からハンセン病者救済活動を行っていたそうです。 またホトトギスが雑誌を購入(50銭)しなければ俳句の 掲載を認めなかったことに反発し、無料で投句するこ とのできる雑誌を刊行するなど社会から隔離されて いたハンセン病者が自分の存在を社会に知らしめる 方法(俳句)と発表する場所(雑誌『鴫野』)を提供し続け ていました。何某かの影響を受けていたその父親が 昭和24(1949)年に亡くなったことで良寛は医師になっ てすぐに、心ならずも開業を引き継がなくてはならな くなってしまいました。

また映画『血と骨』や『夜を賭けて』の舞台となった 地域が自宅から約1km弱のところにありました。その 地域では戦後、空襲で破壊された砲兵工廠の放置さ れた金属類を略奪する集団(通称:アパッチ族)が、それ を阻止しようとする警察などと抗争を繰り返していま した。そこでの医療活動だけではなく住人同士の揉 め事などにも介入し、昭和38(1963)年にアパッチ族を 解散することに尽力したそうです。祖父の本田喜良(俳 号:一杉)の影響とアパッチ族との経験が弱者救済、社 会医療の重要性に気づかせ、釜ヶ崎に自分の居場所 を見つけたのではないかと思っております。その思い と当時の大阪市立大学医学部、行政の方たちの思い が結実したものが大阪社会医療センター付属病院だ と確信しております。今後のご発展をお祈りいたしま す。



病院長室での本田良寛医師



1981.11 鳥取県喜見山摩尼寺

思い出 ――思いつくままに――

[元大阪市長 前社団法人日本 WHO 協会理事長]

閣 淳一

私が大阪府済生会今宮診療所へ初めて行ったの は昭和38(1963)年の年末に近い頃だったと思います。 私は昭和36(1961)年に大阪市立大学医学部を卒業し、 1年間のインターンの後翌年5月に医師免許を得、7月 に当時の大阪市立大学医学部の第二内科へ入局しま した。入局してすぐに医局に掲示してある和歌山県 太地町の町立病院の求人が目につき、聞く所によると この病院では外科と産婦人科に各1人の医師がおら れるもののこの数年内科医が不在とのことで、特に目 に付いたのは月給5万円という待遇でした。当時地方 公務員の初任給は月2万5千円位でした。当時わが家 は経済的に非常に酷しかったので、これだと即決断 し9月から勤務しました。その後1年1か月経った昭和 38年10月に医局からの指示で大学へ戻りました。丁 度太地町から戻った頃に、今宮診療所へ週に1回行っ ていた前任者が辞任されたので第二内科から代わり の医師が求められており先輩の勧めもあり行く決断 をしました。

それで暮に近い12月の終わり頃に大阪府済生会今宮診療所で本田良寛先生に初めてお会いしました。特に面接という様なものではなかったのですが、医師になって未だ2年足らずの経験であり、本田先生も多少の不安を抱かれたのではないかと思いますが、若干これまでのことなどを聞いた後に、「それでは一度やってくれるか、何か困ったことがあればいつでも私に言ってくれ」と言われ、その後週1回、月曜の夜間診療を勤めることになりました。

その後、大学紛争など色々なことがありましたが、 大阪府済生会今宮診療所が大阪社会医療センター 付属病院へと発展的に形態を変えた後も、月曜日の 夜間診療を何度か手伝わせていただきました。

当時のことでまず記憶に残っていることは飲酒して来た患者は診ないという決まりで、夜間診療のとき

も本田先生は基本的に診療室の隣りの部屋におられ 飲酒した患者が文句を言ったりしだすと必ず出てき て「ちゃんとしらふで来い」と言って追い返されてい ました。時にはどなり合いや本当のけんかになったこ ともありました。

もう1点、記憶に残っていると同時に当時なるほど と思ったことは、お金の無い患者に対しては「今日お 金が無かったら払わなくてよいよ、また余裕がでてき たら払いに来てください」とむしろ当然のことの様に 声をかけておられたことです。

当時、大学病院などでは料金未払いの患者をどうして減らすかに注力していたので、全く異なる対処の仕方を目の当たりにして、ある種の納得感を感じたことも記憶に残っています。

今から考えると、当時の本田良寛先生の考え方の背景には釜ヶ崎の日雇労働者の健康問題が常にあり、いわば公衆衛生学と臨床医学を一体として身をもって実行されていたのだと思います。

また当時の本田良寛先生の行動を振り返るとき、 先生が特に意識されていたのではないかと思いますが、 「健康とは肉体的にも精神的にもそして社会的にもす べてが満たされた状態」というWHOの健康の定義 が念頭に浮びます。特にこの中の社会的にも満たさ れたという点についてはわが国において今後とも考 えるべき課題だと思います。



1982.6.27 伊勢志摩

大阪社会医療センターの思い出

[大阪市立大学 名誉教授 元大阪社会医療センター会長、病院長]

門奈 丈之

社会福祉法人大阪社会医療センターが創立50周年を迎えられ、同年(令和2(2020)年12月1日)には新病院へ移転し、診療を開始されたことを衷心よりお喜び申し上げます。

私は平成10(1998)年初夏にあいりん地域で細菌性 赤痢患者の集団発生があった翌年から大阪社会医療 センター付属病院病院長(第4代)として赴任すること になり、当時の環境保健局長福住弘雄先生(医学部同 級生)より対策をよろしくとの連絡がありました。幸い にも適切な治療並びに衛生環境対応が早く(屎尿処理、 トイレットペーパーの無料配布などが行われていたため)、早 期に終息を迎えることができました。

一方、あいりん地域では肺結核が多発しており、 DOTS事業(抗結核剤の服薬を直接確認する結核患者の 短期治療)を受託しており、改めて積極的な対応をす るため東京山谷地域の視察、看護師増を要しました。

さて、大阪社会医療センター創立40周年記念誌により外来受診患者の年齢構成の推移および傷病別構成比を基礎資料として比較すると昭和45(1970)年頃は30歳代が40%近く、40歳代が26.5%を占め働き盛りの日雇労働者が患者の多数を占めていましたのが、私が赴任した平成11(1999)年前後では50~60歳代が70%強へと高齢化へ推移していました。同様に外来患者傷病分類別構成比の検討もされており、筋骨格系および結合組織系疾患の増加に対し骨折、挫傷、切創などは減少傾向を示すようりになりました。これらへの対応として入院病床の区分の変更、外来診療

体制への変更が必要となり、本院各診療科並びに事 務担当者、診療医派遣の医学部教室との折衝には悩 まされました。

平成15(2003)年4月に大阪社会医療センター会長(第6代)へ転じた頃からあいりん総合センターの耐震性が問題となりました。平成20(2008)年度実施の「あいりん総合センター」の耐震診断の結果、合築建物全体として現行の建築基準法と同等の耐震性能を満たしておらず、「あいりん労働福祉センター」は、地震の振動および衝撃に対して被害を受ける可能性が高い「C」評価でした。

あいりん総合センターは、大阪市の施設である市営萩之茶屋住宅および大阪社会医療センター、国と府の施設である「あいりん労働福祉センター」の3施設で構成される合築構造でした。そのため病院施設のみの単独行動は無理と考えられました。しかしあいりん総合センターの耐震化を行うためには、市営住宅と医療施設の移転が前提となります。市営住宅については、大阪市立萩之茶屋小学校跡地へ移転する方向とされ、また、医療施設については、移転する場所・時期については、大阪市のテーマ別の検討会議で検討されることになりました。

その後医療施設検討会議において、大阪社会医療 センター付属病院は近接する萩之茶屋小学校跡地へ 移転することが決定しました。現在は、新病院での診 療をされているとうかがい知りました。今後の大阪社 会医療センターのご発展を祈念しています。



2001.11.18 金沢兼六園



2002.12.8 高野山

大阪社会医療センター付属病院外科24年間の思い出

[元大阪市立大学第一外科・前大阪医療刑務所所長] 加藤保之

このたびは社会福祉法人大阪社会医療センター創立50周年ならびに新病院竣工、誠におめでとうございます。

昭和53(1978)年6月大阪市立大学医学部第一外科に入局して早々に、先輩に声を掛けていただき、月・水・金18時から20時まで行われていました夜間診療に週1回携わったのが大阪社会医療センター付属病院とのご縁でした。臨床研修医として赴き、第一外科助手となって2回病棟勤務を経験しました。その後も平成14(2002)年まで夜間診療を続け、24年間あいりん地域の患者さんを診させていただきました。

昭和50年代の地域は活気があり、日本一の寄せ場 で、労働者は若く、全国の工事現場に行き、高度成長 期日本の国づくりの一翼を担いました。出張から帰れ ば大金を懐にドヤ(簡易宿泊所)で暮らし、朝から酒を 飲んでいても、どのような服を着ていても構わない自 由さがありました。金目当てのシノギ(ひったくり)の被 害者となり、顔をなぐられ内出血で青たんをつくり受 診する人も多くいました。解体現場で釘を踏み抜い たり、長靴にセメントが入り、アルカリによる皮膚潰 瘍の治療も多くありました。山盛りのウナギの頭やア ジの頭をあてに飯を食べず、ただひたすら酒を飲む ことから、直腸にそれらの小骨が充満し、自然排泄が できなくなり受診した人たちがいました。浣腸しても 液は入るのですが、液のみが還ってきて小骨は取れ ません。手袋をして指で掻き出さざるをえませんでし た。同性愛者に行為を断った腹いせに枕元に置いて いた食べさしのリンゴを肛門(直腸)に入れられた、な

んとかしてくれ、との訴えでしたが、最初は何を言っているのかわかりませんでしたが、レントゲン写真を撮って調べるとその通りでした。食べさしであったことを怒っていました。他では経験できない症例をたくさん診させていただきました。

本田良寛先生は昭和38(1963)年に医師が不在と なった大阪府済生会今宮診療所から乞われて城東区 鴫野の医院を閉じ、第4代所長として赴かれました。 その際、診療所・大阪市立大学医学部・本田先生の3者 において5項目の確認事項を取り交わされました。「第 一に本田個人で行くのではなく、市大医学部の推薦 によって行くこと。第二に単なるおざなりの診療活動 でなく公衆衛生活動を含めた調査活動を並行させる こと。この点は常に大学の計画に従って行う。……」 とあり、その後の結核やアルコール性肝障害の実態 調査など多くの業績を残されました。先生は昭和45 (1970)年に大阪社会医療センター付属病院初代院長 に就任されました。病院の名前をどうしようか考えた が社会医学という分野があったことから名付けたと 先生からうかがいました。わたしは平成14年に大阪 市立大学を辞し、法務省の大阪医療刑務所に着任し ました。センターでの経験を通して受刑者に対する 矯正医療は社会医療であるとの思いを強くしました。 本田先生はじめ多くの職員の方々のお世話になり、本 当にありがとうございました。

大阪社会医療センターの今後益々の発展を祈念しています。

参考文献

- 1) 加藤保之「矯正医療は社会医療——本田良寛(よしひろ)先生と出会い——」「矯正医学」61、2013年、106-110頁
- 2) 加藤保之「社会医療としての矯正医療~本田良寛先生との 出会いと大阪社会医療センターでの経験を通して~」「刑政」 125(4)、2014年、100-107頁

大阪社会医療センター付属病院へ勤務して

中田 信昭 [アエバ外科病院 整形外科医長]

社会福祉法人大阪社会医療センター創立50周年 おめでとうございます。私は昭和63(1988)年7月~平 成4(1992)年6月(整形外科長)、平成8(1996)年4月~平 成13(2001)年3月(平成9(1997)年7月から整形外科部長) および整形外科学教室高岡邦夫教授に出向許可をい ただいた平成15(2003)年4月から平成25(2013)年3月 (平成17(2005)年4月から副病院長兼整形外科部長)までの 3期在籍しました。

当初はあいりん総合センター前には手配師の車が 引けを切らず一日中満杯であり「あいりん地域」は日 雇労働市場として活況を呈していました。その当時 整形外科単科初診患者の中には結核、高血圧ならび に肝硬変などを疑わせるケースが多く見られ、再診の 確証がなくその日の診断が命を左右しかねず血液検 査や内科受診の必要性を説明し整形外科医とはいえ 表情から始まる患者の全身的な観察の必要性を感じ ました。通りすがりの人から「先生に貧血を指摘され 胃癌の早期治療を受けることができました」と声をか けられたこともあり、あいりん地域における医療の糧 となりました。

また、平成2(1990)年の暴動のさいには新今宮駅周 辺で多くの車両が焼かれ、通勤時巻き添えを食いか けましたが「大阪社会医療センター付属病院に出勤 途中」と話すと難を逃れられ、センターは労働者に「命 と生活の拠りどころ」として中立的に評価されている ことを実感しました。

法人が行う事業のうち「社会医学的調査研究」に関 し平成17年度および平成19(2007)年度における社会 医学研究会を担当しました。要旨の概略を記載しま

・平成17年度社会医学研究会「あいりんの痛風性 関節炎 --- 摂取栄養素から見た特徴 --- 」: 整形外 科外来における痛風性関節炎の割合は比較的高い(平



整形外科病室で診察する中田医師



1993.10.16 有馬温泉



2000.12.16 京都高台寺料亭土井

成16年10月新患に対する割合 - 13.5%)。

「痛風患者群」では総エネルギー(アルコールエネルギーを含む)以外のすべての摂取栄養素は「日本人の摂取食事基準(2005年度版)」における基準値を下回り、特にカリウム、食物繊維VB1およびVCについては健常対照群に比して有意かつ著明に低値であり、栄養素欠乏状態下での痛風発症が特徴と考えられた。

・平成19年度社会医学研究会「大阪社会医療センター付属病院における結核検診について」:整形外科単科外来初診患者538人に胸部X線による結核検診を行ったところ要医療率2.4%(13人)であり平成16(2004)年度あいりん地域での結核検診における患者発見率1.1~1.8%とほぼ同水準であった。この研究にさいしては胸部X線読影について大阪市保健所下内昭先生に教えを請うためフイルムを持参しお伺いした。

さらに大阪大学大学院医学系研究科社会環境医 学講座公衆衛生学の高鳥毛敏雄先生には第81回日 本結核病学会総会発表および論文作成にあたりご 指導・御高閲を賜り大変お世話になりました(学会発 表:日雇い労働者・野宿生活者対象の無料低額診療施設にお ける結核検診の試み、(於仙台)、原著論文:結核高罹患地域 における医療施設外来受診者に対する結核検診の意義の検 討.Kekkaku 82(5):455-458,2007)。

また、四天王寺大学人文社会学部逢坂隆子先生が研究代表者である2010-2012年度科研「基盤研究 C」「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の 推進に関する研究」の研究分担者として病院内の研 究体制の調整と推進にあたりました。

在職中大学での研究、大阪社会医療センター付属病院での診療および社会医学的研究に従事し充実した日々を過ごさせていただきすべての職員の皆様に感謝申し上げます。当時の滝口和夫専務理事、整形外科部長大向孝良先生には有意義なご指導をいただきました。中平文也総務課長には患者対応、社会医学的研究や大阪社会医療センター付属病院での初の出張裁判(平成20年-傷害事件における証人喚問)など院内・院外交渉含め一言では言い尽くせない程大変御世話になりました。私事ですが大阪社会医療センター付属病院および大阪市立大学整形外科学教室にいささかなりともお役に立てたのなら幸甚に存じます。今後とも大阪社会医療センター付属病院があいりん地域および周囲地域の人々に有意義な施設として益々の発展を遂げられますことを念願いたします。



1993.10.16 神戸フルーツフラワーパーク



2004.10.30 小豆島

大阪社会医療センター付属病院を思い出して

[浅香山病院 内科統括部長] 大村 崇

創立50周年おめでとうございます。私は平成9(1997) 年7月から平成18(2006)年3月まで内科に勤務していました。当時は大阪市立大学第一内科助手の肩書きで出向し、週2日と半日の勤務で、大学と行き来できた時代でした。退職してから10年以上が経過して細かなことは忘れていますが、その印象と経験は今でも鮮烈に残っています。今回、工藤新三先生より記念誌への執筆の機会をいただき、当時を思い出してみました。

内科外来は週2回担当していました。非常勤の医師と3人でする診療は1日に患者100人以上、多いときは200人超えもあったと思います。患者は日雇労働者や路上生活者が大半で、衣食住を含めた経済的な問題を抱え、病院に来る理由は身体的な問題だけでなく、生活ができずにとりあえず受診するよう言われてくる人も多かったように思います。長蛇の列を並んで待って受診できる程度の病状であるのが前提でしたが、我慢強い重症患者が紛れ込んでいることも珍しくなく、緊急を要する対応で何度も寒い思いをした覚えがあります。とにかく、次から次に診ていく中で、必要と判断すれば血液検査、尿検査、単純X線写真、CT、エコーを駆使して何とか診療をしていました。

また、結核患者が多いのも、大阪社会医療センター 付属病院では当たり前でした。排菌している肺結核 患者の入院はできませんが、服薬コンプライアンス を向上して治療効果を上げる目的で第3者が服薬を外来で確認するDOTS (Directly Observed Treatment Short Course)も導入されて関わっていました。このような状況の中、勤めて数年後に自分のツ反が7~8cmに腫れたのは少しショックでした。

病棟は内科入院を大阪市立大学医学部附属病院 第三内科のドクターと半分に分けて担当し、週3回の 回診で診ていました。普段、治療を受けていない患者 が多く、病気の末期でなければ、治療に大変よく反応 して良くなる場合が少なくなかったと思います。また、 病院の看護師、MSW、事務、ガードマンの皆さんとも 気さくに話しやすく、できる医療は限られてはいますが、 とても働きやすい職場でした。

時は流れ、現在の大阪社会医療センター付属病院は、外来や入院の患者数は私の知っている頃とは変わってきていると聞いています。そして現在、私が大阪社会医療センター付属病院で勤め始めたときの外科の小野田尚佳先生の娘さんが内科医師となり、今一緒の職場で働いています。時代の移り変わりを感じながら、新病院での大阪社会医療センター付属病院が今後も特殊な役割を果たしつつ、次の50年以内にはその特殊な役割が必要でなくなるような社会へ進むよう期待しています。



1997.11.22 南紀勝浦

創立50周年を迎えられて

[元病棟師長] 山下 久美子

創立50周年ならびに新病院への移転、おめでとうございます。

私が大阪社会医療センターに在籍いたしましたのは、平成4(1992)年から平成21(2009)年5月までの17年2か月の期間でした。入職した当時のあいりん地区は、高度成長期もとつくに過ぎ、失業者が多く、センター周辺はホームレスの人であふれかえつていたと記憶しております。外来は毎日400人から500人の外来患者があり、特に、感染症が流行している時期は、日に700人ほどの患者であふれ、待ち時間が長いためイライラがつのりトラブルや喧嘩が日々起こっていました。

また、病棟では手術の症例も多く、医師に依頼して 勉強会を開催し、看護部のレベルアップにつなげる 研究発表も行ってきました。この病院は他の医療機 関と違い、身寄りのない患者がほとんどで、自分の病 気と一人で向き合わなければなりません。入院とな れば、病院の規則に従わなければならず、それまで外 で自由気ままに暮らしてこられた患者にとってはスト レスも多く、看護師とのトラブルも日常的でした。

私は朝礼までの間に当直看護師から申し送りを受け、全病室をラウンドし苦情処理を行い、その日のうちに問題を解決できるよう努めてきました。

また、手術前の医師からのインフォームドコンセントに立ち合い、患者の理解が得られるよう、また患者自身に不利益が被ることのないよう補足してきました。



1996.11.17 箱根

エンドステージが近い患者に対しては、医療ソーシャルワーカーを通じてご家族を探してもらい、北海道や 九州から来院していただいたこともありました。その 時は患者の喜ぶ顔が見られ、面会していただいて良 かったとつくづく思いました。

怖かった出来事は、勤務を終えて帰宅する途中に、 患者に自宅近くの公園まで追いかけられたことです。 診察時の苦情を言われて、それが延々1時間以上続き ました。たまたま巡回中のパトカーに発見されて解放 され、ホッとしました。悲しい出来事は、当院の外来 看護師が駅で信号待ちをしているときに背後から刺 されるという切創事件があったことです。被害者は 緊急手術で一命を取り留めましたが、大きな後遺症 が残り退職を余儀なくされたことが残念でした。この 時の犯人は何年か後に逮捕されました。テレビの報 道特集で大阪社会医療センター付属病院が全国放 送された際は、あいりん地域の病院としての役割を認 識していただき、放送後に日本中から大きな反響が あったとうかがいました。

現在ではあいりん地域も福祉の町へと変貌し、また、 超高齢社会となり単身世帯が増えたことによって、大 阪社会医療センターとしての役割も大きく変化して いくことと思います。

最後に大阪社会医療センターの益々のご発展と職 員の皆様のご多幸をお祈り申し上げます。



1999.11.7 北海道小樽

医療センターと私

[元総務課長] 長谷川 洋子

昭和45(1970)年、地方の都市に住む私に日本万国 博覧会もあと2か月余りとなった頃突然親戚より転職 の話があり、詳しいことも分からずとりあえず話を聞 くということで来阪しました。当日の夜は天神祭へ連 れていってもらい、とても暑く人の多さにびっくりし ました。翌日はあいりん地区のビルに行き、2~3人の 方に紹介され、挨拶しているうちに転職ということに なり、なんとなく決めたことにわれながら情けなくポ ロポロ泣きながら帰ったことは鮮明に覚えています。 家の者にもきっちりと説明できないまま、バタバタと 整理、今後の生活の準備をしているうちに9月1日を 迎え、社会福祉法人大阪社会医療センターに転職し ました。すでに20人ほどの方がおられましたが、物の 考え方、行動などの認識不足や違いで戸惑ったもの でした。当初新今宮駅からの通勤の行き帰りの路上 で寝ている人たちを見て心が痛みましたが、その光 景にも馴れてきて余り気にならなくなるのにも時間は かかりませんでした。

大阪社会医療センターの在職中のことを大きく分 けると3つになります。

初代病院長の本田良寛医師が自らの体験から苦労 し行政を動かし奔走し日雇労働者の医療などを考え て設立された施設でした。しかし、あちらこちらから 集まった人々の気心もわからず、職員間の意思も思う ように伝わりませんでした。当初は外来診療のみでし たが12月から入院患者を受け入れて、業務量・職員数 も増えるという問題もありました。しかし、それも決ま りごと、約束ごと、皆の努力により当初の目的通り整つ てきました。

そんな中で職員組合が結成されたのですが、意見 の違いから100人に満たない職員数だというのに労 働組合が2つにわかれ、職員同士、運営上でも振り回 されることが多くなりました。

最後は外来看護師の切創事件です。平成7(1995) 年1月阪神大震災から1週間後、通勤途中信号待ちを しているときに看護師が刺されるという事件が起き ました。救急搬送されて緊急手術となりましたが、輸 血血液が足りずに職員総出で献血へ行ったことが印 象的でした。一般市民から釜ヶ崎は恐いところとい われていましたが、私たちは少なからず労働者に守ら れているという思いがありましたのでこれはショック でした。女性職員の不安や恐怖はいかばかりだった でしょう。事件にあわれた外来看護師には、まだ小さ いお子さんたちもいて、ご主人、ご両親も大変な思い をしたことは忘れることはできません。

それとは別に労働者による何度かの西成暴動、大 阪社会医療センター設立に尽力された本田病院長が 病に倒れ、死去されたことを思い出します。地域の労 働者が衣類に困っているので、「古着SOS」と新聞に 載り、市民からの沢山の古着などがダンボールで送 られてきました。毎日職員が荷物の仕分け作業を行 い、病院中が衣類であふれかえり、元あいりん小中学 校の校舎を借りた思い出があります。

2年くらいで郷里へ帰る予定で大阪へ来て、定年ま で在職し、その後も暮らした50年間は感無量です。

月並みですが皆様に大変お世話になりましたこと お礼申し上げます。



1989.9.30 西浦温泉